

CAMPUS NOW

早稲田大学広報

No. 261
2026/07



特集 WASEDA's Global Campuses



巻頭インタビュー
駐日ジョージア特命全権大使
ティムラズ レジャバ

TEIMURAZ LEZHAVA



駐日ジョージア特命全権大使 ティムラズ レジャバさん

異なる文化に触れる瞬間、磨かれる感性

ヨーロッパとアジアの境目、コーカサス山脈の南麓に位置するジョージア。同国の駐日特命全権大使であるティムラズ レジャバさんは、4歳の時に日本へ移住。2007年に早稲田大学の国際教養学部へ入学した。

「ジョージア、日本、米国と、全く異なる文化圏で幼少期を過ごした私は、新たな環境に馴染むことで成長してきました。同じような経験を大学でも積みたいと考え、グローバル化を推進する早稲田大学に憧れを抱き、他大学から転学しました」

英語のみで学士号を取得できる国際教養学部では、2004年の創設以来、多くの外国人留学生が学んできた。レジャバさんも在学中、多様な国籍の学生と親交を深めながら自身の視野を広げていった。

「日本はもちろん、韓国や中国、遠い国ではボルトガルまで、さまざまな学生と出会いました。皆と同じ教室で学んだ日々は、何にも代え難い宝物です。友人たちとは今も親しくしています」

早稲田キャンパス近くの学生寮で暮らしていたレジャバさんは、周辺の庭園を巡ることで、日本文化への理解を深めたという。

「甘泉園公園、肥後細川庭園、椿山荘庭園、関口芭蕉庵などを、暇があれば散策していました。気に入った場所は、日本人学生を連れて再訪し、文化的背景などを質問することもありました。キャンパスから少し歩けば伝統の息吹を体感できるのも、早稲田

の素晴らしさだと思います」

卒業後はキッコーマン株式会社に就職し、首都圏営業や海外営業マーケティングなどを経験。退職後は母国で起業に挑み、ジョージアと日本をつなぐ経済活動に従事した。こうした中でジョージア外務省から受けたのが、大使館任務の依頼だ。臨時代理大使に就任後は文化交流や広報活動にも注力。SNSのユニークな投稿はジョージアの文化を日本に広めるきっかけをつくった。

「外交の世界では、過去の慣習に基づく行動が重視されますが、私の試みは、早稲田特有の型にはまらない在野精神に育まれたのかもしれない。行動力や表現力、失敗を恐れずにチャレンジする勇気は、国家間の架け橋として役割を果たす上でも大切な要素だと信じています」

近年、地球規模の課題は複雑化し、テクノロジーの進化は人間のあり方を問い始めている。こうした状況の中でレジャバさんは、個性を重視するグローバル教育に期待を寄せる。

「どんなにAIが普及しても、最後に残るのは人間の感性です。早稲田大学は、多様な地域、国から学生が集まる環境が魅力。異なる文化に接しながら、自分や自国の文化を見つめることで、個性は磨かれ、感性は豊かになるでしょう。これからもグローバルな早稲田のキャンパスから多彩な人材が羽ばたくことを願っています」



PROFILE

1988年ジョージア生まれ。1992年に日本へ移住した後、ジョージア、日本、米国、カナダで教育を受ける。2011年早稲田大学国際教養学部卒業。2012年キッコーマン株式会社入社。退職後、ジョージア・日本間の経済活動に携わり、2018年ジョージア外務省に参事官として入省。2019年在日ジョージア大使館臨時代理大使に就任。2021年駐日ジョージア特命全権大使に就任。



特集

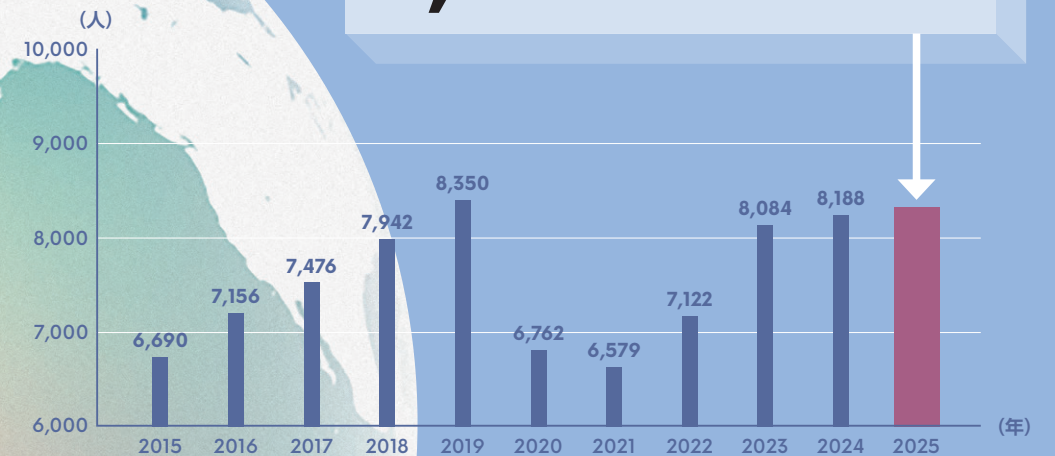
WASEDA's Global Campuses

世界人類に貢献する人材の育成を目指し、
早稲田大学ではグローバル教育を推進してきました。
100以上の国や地域出身の学生が集まるキャンパスでは今日、
授業や課外活動を通じ、国際色豊かな交流が活発化しています。
本特集では、異なる文化や価値観に出会いながら成長する、
学生たちの姿をご紹介します。

数字で見る、早稲田のグローバルキャンパス

外国人学生数

8,274人 (2025年度の通年在籍者数)



外国人学生の出身国・地域数



117 力国・地域

(2025年度の通年。大学院などを含む大学全体の数値)

海外協定機関数

90以上の国・地域
800以上の大学・機関
(2025年12月現在)



海外への派遣留学生数

4,126人 (2025年度)



英語学位プログラム設置数

6学部**15**研究科
(英語のみで卒業・修了できる
プログラムの設置数)



外国籍教員数

243人 (2024年度／常勤教員)





多様な学生に開かれた交流拠点で
異文化交流をサポートする

Planning and Managing Opportunities for Intercultural Exchange

商学部4年

Milana Bashutskayaさん

学生スタッフリーダーとして
ICCのイベントを
企画・運営しています

言語や国籍の壁を超えることで
育まれたコミュニケーション能力

私は、国籍や出身地の異なるさまざまな学生に、交流の機会を提供する「ICC(異文化交流センター)」で、学生スタッフリーダーとして活動しています。早稲田キャンパスに位置するICCには、誰でも自由に過ごせるラウンジが設置され、授業の空き時間などに、多様なバックグラウンドを持つ学生たちが会話や食事を楽しんでいます。海外にルーツを持つ私は、入学直後からICCを利用するとともに、学生スタッフリーダーとしてセンターの運営にも携わってきました。

ラウンジでの受付業務や広報活動といった通常業務に加え、特に力を入れているのがイベントに関する業務です。ICCでは音楽やスポーツ、食、街歩きなど、多彩なイベントの企画や運営を学生スタッフリーダーが担っています。学期毎に自主企画提案の機会があり、私は過去にバスケットボールのイベントを企画しました。「言語の壁を超えるスポーツで皆に交流してほしい」と考え、ポスターやSNSで幅広く募集したところ、普段ICCに馴染みのない方を含め、多くの学生が参加してくれました。2026年春学期には、学外のサークルをゲストとして招き、世界の民族舞踊をテーマとしたイベントを企画しております。多様な文化を体験できる内容を目指しています。

またICCでは、英語によるコミュニケーションを楽しむ「イングリッシュ・アワー」、中国語やフランス語など特定の言語で話す「言語ランチ」、日本語を学びたい学生に向けた「にほんごペラペラクラブ」など、特定の言語で会話するイベントも開催しています。講義で学んだ外国語を話してみたい学生にも人気です。

ICCの活動を通じて身についたのは、バックグラウンドが異なる学生と接する力です。相手の困りごと一つとっても、文化や習慣、言語レベルによって、配慮する視点は変わります。また、異文化交流に興味があるものの二足を踏んでしまう学生もいますが、明るくフラットに接することで、数週間で会話を楽しめるようになります。小さな障壁が取り払われ、利用者が新たな文化体験に触れる姿に、私はやりがいを感じてきました。こうした経験から人材マネジメントに興味を抱き、商学部の「Global Management Program(GMP)」※で企業の採用や育成、組織管理などの方法論を学んでいます。卒業後は大学院で研究を深め、将来は多国籍な環境でマネジメントに携わりたいと思っています。

※商学部の国際教育プログラム。ゼミや専門科目が英語で提供され、グローバルビジネスリーダーに求められる課題解決力やコミュニケーション能力を習得できる。

ICC
(異文化交流センター)



早稲田キャンパスに設置される異文化交流の拠点。ICCラウンジでは、多様なバックグラウンドを持つ学生たちが自由に交流する。学生スタッフが運営する年間約200のイベントも特徴。



英語学位プログラムにチャレンジし グローバル視点で自分を磨く

Self-Improvement Through an English-Based Degree Program

社会科学部3年

永島亮佑さん

グローバルなチームで課題に挑んだ 台湾でのフィールドワーク

途上国開発や国際政治に関心があり、社会科学部の「平和・国際協力コース」で学んでいます。ゼミや専門科目と並行して活用しているのが、英語学位プログラムの「TAISI」です。英語の講義のみで学位が取得できるTAISIでは、主に外国人留学生や帰国生が学んでいますが、一般の日本語カリキュラム履修生も、科目を受講することが可能です。私は日本で育ち、海外で暮らした経験がないため、より広い視野を身に付けたいと、TAISIで複数の単位を取得してきました。

その一つ、「Global Lab 3」は、災害対策をテーマとした台湾でのフィールドワークです。国立清華大学の学生とともに5日間、新竹県五峰郷に滞在し、インフラ事情や防災意識について住民にインタビューを実施。得られた情報をもとに問題を分析し、改善案を郷長に提案しました。北京語、広東語、台湾語、日本語、英語が飛び交う実習チームで出会ったのは、価値観の違いでした。例えば、日本では災害時の避難所でプライベート空間の確保が優先されるのに対し、同地では開放的なコミュニケーションが重視されていたのです。自国で暮らすだけでは気づかない視点は、文化の異なる地での公共施策にも役立てられると思います。

TAISIではほかにも、アフリカ開発の課題について議論する「Education and Development」、気候変動や食料安全保障を学ぶ「Global Food Security」などを受講しました。入学時、特別な英語力を備えていなかった私ですが、社会科学部では1年次の必修で少人数制の英会話やライティングの授業があり、基礎を磨いた上でTAISIにチャレンジすることができました。

バックグラウンドが異なるTAISIの仲間が与えてくれるのは、自分の固定観念を砕く新たな視点です。授業外でもジェンダーや政治などについて語る機会が多く、彼らと日々対話を重ねながら、自ら仮説を立て、意見を持つ姿勢が養われていると感じます。

自分のテーマである国際協力への理解も深まり、現在は社会課題の解決と事業の持続性を両立する仕組みに興味を抱いています。将来は、培った多角的な視点を生かせる仕事に就きたいと思っています。

日本語の授業と並行し
英語学位プログラム「TAISI」
の科目を履修しています



TAISI



社会科学部の英語学位プログラム。国際化時代に適応した幅広い教養とコミュニケーション能力を備えグローバルに活躍できる学生を育成し、日本や世界に送り出すことを目的に設置されている。



基幹理工学部3年

Harika Hazal Korkusuzさん

情報通信科学の研究室で
無線通信やセンシング技術に
アプローチしています

英語学位プログラムで専門分野を学び サークル活動で日本文化を深める

トルコ出身の私は、母国の大学で医学部を卒業後、米国・ニューヨークで医師として勤務していました。しかし、ものづくりが好きだったことから、徐々に工学や神経科学への関心が高まり、キャリアチェンジをして早稲田大学へ入学しました。2年生までに数学や物理学、コンピュータ工学やAIの基礎を学び、現在は卒業論文に向け、脳波センシングなどの生体情報からロボットを制御する技術を研究しています。目指しているのは、脳に障がいを抱える方のリハビリなどへの応用です。

早稲田大学を進学先にしたのは、英語学位プログラムを提供するアジアの大学の中でも、工学の分野でトップクラスの研究水準だったからです。また、さまざまな国籍の学生が集まる環境で学生生活を送り、日本やアジアの文化を学びたいという思いもありました。研究室には、多様な国籍の学生が所属するだけでなく、理工学術院には外国籍の教員も多いです。授業が日本語と英語の両方で提供されるほか、学部生への研究指導が本格的で、研究人材の育成に注力している点も、修士号取得を目指す私にとって魅力でした。

英語学位プログラムの授業は約半数が日本人で、残りはインドやインドネシア、マレーシア、韓国、バングラデシュなど、さまざまな国の学生から構成されます。彼らとは英語を共通言語にしながら、グループワークなどに励んでいます。一方、課外活動として参加しているボクシングのサークルでは、外国人留学生は私一人。日常会話では、求められる語学スキルが研究などと異なるため、思い通りにコミュニケーションができないこともあります。しかし友人たちが文法や発音を親切に修正してくれるので、日本語の能力を高めることができています。

トルコと米国で生活してきた私に対し、日本の文化は多くの学びを与えてくれます。なかでも、相手の気持ちを考えながら会話をする日本人同士のコミュニケーションは、非常に魅力的だと感じます。また、目上の人に対する敬意や空間を清潔に保つ心など、トルコと類似する点も多くあります。文化とは何か一つが正しいのではなく、個々の文化に意味があり、それぞれを理解する姿勢が大切だということも、人々と出会う中で気づかされました。

卒業後は、早稲田の大学院に進み研究を続けることを希望しています。将来はアカデミアや企業の機関で、研究者としての道を歩みつづけたいです。



国際教養学部4年

宮本紗希さん

先進的な学園都市で生活し 環境政策やリベラルアーツ教育を学ぶ

高校時代までに日本、米国、ドイツで生活した経験があり、国際感覚をより磨きたいと思い、早稲田大学に進学。多くの外国人留学生が集まる環境で、リベラルアーツ教育を主軸に多角的な視点を養える国際教養学部を選びました。国際教養学部で日本語を母語とする学生は、1年間の海外留学が必修です。私は2年生の秋から、先進的な環境都市で海外のリベラルアーツ教育を学ぶべく、ドイツのフライブルク大学に留学しました。

振り返ると、この留学生活を通じて、社会生活を送る上での意識が大きく変化したように感じます。環境保全を目的とした交通規制が行き届いていたり、学生食堂で植物由来のメニューが半分以上を占めていたり、フライブルクでは多くの先進的な試みに触れ、商品の購入や自分の発言など、一つひとつの選択が社会や環境に影響を与えていることを、改めて考えるようになりました。また、学生の人口が多いフライブルクでは、若者同士が社会問題について議論することが日常茶飯事で、学生のデモも頻発します。若者の行動には都市側も協力的で、デモの際に路面電車のダイヤを調整するケースもあります。自分一人だけでなく、周囲を含め現状を良くしようとする考えに触れることで、私自身も社会問題の本質を深く見つめることができました。

初めての長期留学に初めての一人暮らしが重なり、家族の助力がない環境で暮らすには、殻を破るような勇氣も必要でした。しかし、自力で留学の準備を進め、現地の人々の助けを得ながら、責任と意図を持って行動する中で、主体性を養うことができたと感じます。また、バックグラウンドの異なる学生と意見を交わすと、日本の教育で学んだ常識を見つめ直すことも多く、新しい自分を発見することもできました。

ドイツから帰国し、留学生から現地学生という立場に戻った今、自分が異文化交流をつくる一員でもあると再認識しています。外国人留学生が過ごしやすい雰囲気を意識することは、双方の視野を広げる上でも大切です。これからも多くの人との対話を通じ、自身の価値観をアップデートしていきたいです。

ドイツのフライブルク大学に
1年間留学しました



初めての長期留学への挑戦が
自分の殻を破るきっかけに



グローバルな環境で学びを深め 複雑な社会問題を解決したい

Cultivating Problem-Solving Skills on a Global Campus

政治経済学部4年

Nathan William Fujii さん

グループワークで交わる 多様な学生の文化や価値観

16歳まで米国で育ち、高校から日本のインターナショナルスクールに進学した私は、大学で経済学を学びたいと考えていました。英語学位プログラムと日本語教育科目が設置され、多国籍な学生が集まる環境に魅力を感じ、早稲田大学の政治経済学部に進学しました。

英語学位プログラムの授業は、ディスカッションやプレゼンテーションの機会が多く、多様な国や地域の出身学生と意見を交換します。リサーチや資料作成などの共同作業を行うグループワークでは、作業への取り組み方に、それぞれの文化が現れるなど、ユニークな気づきも多いです。クラスメイトとは食事や旅行に行くこともあり、インドネシアの大学で授業を受けたこともありました。

日本語のスキルの向上を目指し、「日本語教育研究センター」に設置された科目も履修しています。ニュースについて日本語でディスカッションを行ったり、日本人のボランティア学生のサポートを受けたりと、充実した内容が特徴です。初級から上級まで段階的に能力を高められるカリキュラムにより、現在は本科の日本語の授業も履修できる語学力がつけました。

早稲田大学で出会った日本の学生は、授業や課題に対する姿勢が実直であり、目的意識も明確で、刺激を受けました。そして、日系移民をルーツに持つ私のバックグラウンドを尊重してくれたことは、何よりもうれしかったです。

現在学んでいる専門分野は、環境経済です。環境政策の立案や成果を、計量経済学の視点で分析しています。早稲田での学びを、気候変動をはじめとする複雑な社会問題の解決に役立てるのが、私の夢です。

英語学位プログラムで
環境経済学を学んでいます



撮影＝早稲田キャンパス 3号館



寮での共同生活で深め合う 多様な文化への理解

国際学生寮WISH



グローバルリーダー育成の拠点「早稲田大学中野国際コミュニティプラザ」に設置される国際学生寮。日本全国・世界各地から集まった学生たちがともに学び生活する。

Deepening Understanding of Diverse Cultures Through Communal Living

法学部4年

伊藤遥陽 さん

異なる価値観が共生する 国際色豊かな学生寮「WISH」

中学・高校時代からスピーチコンテストに参加するなど、英語学習に力を入れており、グローバルな環境で学びたいと、早稲田大学に進学。1年次より国際学生寮「WISH」で生活しています。WISHでは、日本人学生と外国人留学生約900名が共同生活を送っています。4人1ユニットの寮室、ラウンジや浴室、フィットネスルームなどが設置され、国籍や出身地の異なる多様な学生と、毎日のように交流できるのが魅力です。例えば、共同で利用するコミュニティキッチンでは、別の学生がつくる他国の料理を味見するなど、生活を通じて親交を深められます。また、WISH独自の「Social Intelligenceプログラム」*が実施されており、大学の授業以外にもグローバルスキルを高められるのも特徴です。

2年生からは「レジデント・アシスタント(RA)」として、WISHの寮生を支える活動に注力してきました。寮生活での困りごとや悩み相談などへの対応、公式イベントの企画・運営が、RAの主な役割です。この夏は、寮内での夏祭りを準備中です。短冊づくりやスイカ割りなど、「日本の夏を体験したい」という寮生の声を受け、文化を通じて交流を深めてほしいと、企画を立案しました。寮生の多様なニーズに耳を傾けながら、RA同士で、時には英語でコミュニケーションを取り、共通の目的を達成する活動では、大変なこともありますが、「寮生に楽しい思い出を残してほしい」というモチベーションを原動力に、仲間たちと一緒に乗り越えてきました。WISHでの生活を通して、文化の違いから生じる課題を解決するためのスキルを身につけられたと感じます。卒業後も、この経験を社会で役立てていきたいです。

※大学とRAの学生による課外授業。

国際学生寮「WISH」で
RAとして活動しています



撮影＝中野国際コミュニティプラザ 国際学生寮WISH ラウンジ 15



多様な価値観が交差する、 国際的なキャンパスへ

早稲田大学のグローバル教育

早稲田大学ではグローバル化推進にあたり
教育プログラムの拡充やキャンパス環境の整備を強化しています。
須賀晃一副総長が、大学の方針と施策の内容を説明します。

早稲田大学副総長
須賀 晃一

世界人類に貢献する人材の育成を目指す 早稲田のグローバル教育

本学の創立者である大隈重信は「一身一家、一国のためのみならず、進んで世界に貢献する抱負が無ければならぬ」という言葉を残しました。建学の理念は現代に受け継がれ、早稲田大学は“世界人類に貢献する人材の育成”を目指しています。人類規模の複雑な課題にアプローチする上で求められるのは、“人間の力量”です。地球上のどこへ行っても、人々の幸福の実現を目指す強い意志を持ち、多様な文化と価値観を尊重し、その地域を愛することで人々の心を動かし、社会が直面する問題を協力して解決しようと他のために貢献する。こうした精神と行動力を備える人材は、グローバル企業や国際機関のみならず、国内外のさまざまな領域で活躍するでしょう。

グローバル教育の推進で具体的に重要なのは、世界中の人材と知を早稲田に集め、再び人材が世界へと羽ばたく、“国際頭脳循環”です。本学は各種教育プログラムの拡充、研究人材の招致、ダイバーシティ推進などに取り組み、多様な留学生や研究者が自由に行き交うキャンパスを構築してきました。こうした環境の中で、学生たちはさまざまな能力を獲得しています。

異なる意見を交えることで 問題解決力が磨かれる

グローバルなコミュニケーションの土台となるのが語学力です。本学では多様な学生が学びを深められるよう、6学部15研究科において「英語学位プログラム」を設置。英語により学位を取得できる仕組みを構築するとともに、科目の一部を日本語学位プログラムの学生にも開放しています。また、全学部共通の科目を提供する「グローバル・エデュケーション・センター」では、英語の基礎スキルを身につけられる科目とともに、20を超える多彩な言語科目を提供。各国の文化的背景も、その国の言語を通じて学ぶことが可能です。外国人留学生に向けては「日本語教育研究センター」が、日本語能力や日本文化への理解力を高める教育を展開しています。これらの多彩な科目を、学部で

の専攻と併せて履修することで、答えのない問題に対し解決策を考え抜く“たくましい知性”と多様な価値観を持つ人々を尊重する“しなやかな感性”を養うことができるでしょう。

ただし、これらの力を内側に備えるだけでは、国際社会におけるパートナーと協働する上で、十分とはいえません。他者とともに現実の問題に立ち向かうためには、異なる意見に耳を傾け、熟議を通じて思考を共鳴させる“ひびきあう理性”も必要です。各学部での授業やゼミではディスカッションやグループワークを強化していますが、この場にバックグラウンドが異なる学生が参加することで、議論は一段と深化するでしょう。

そして授業外の時間を使った課外活動も、重要な役割を果たします。異文化交流の機会が日常的に提供される「ICC(異文化交流センター)」、ボランティア活動を通じて社会課題解決に挑む「WAVOC(平山郁夫記念ボランティアセンター)」、共同生活の中で国際感覚を培う「国際学生寮WISH」など、本学はプログラムや設備の拡充を図ってきました。近年はサークル活動における外国人留学生の参加も目立つようになり、学生起点の国際交流も充実化しています。また、協定校との連携を通じ、海外への留学も促進しており、現在は年間4,000人を超える学生が、さまざまな国・地域で学びを深めています。

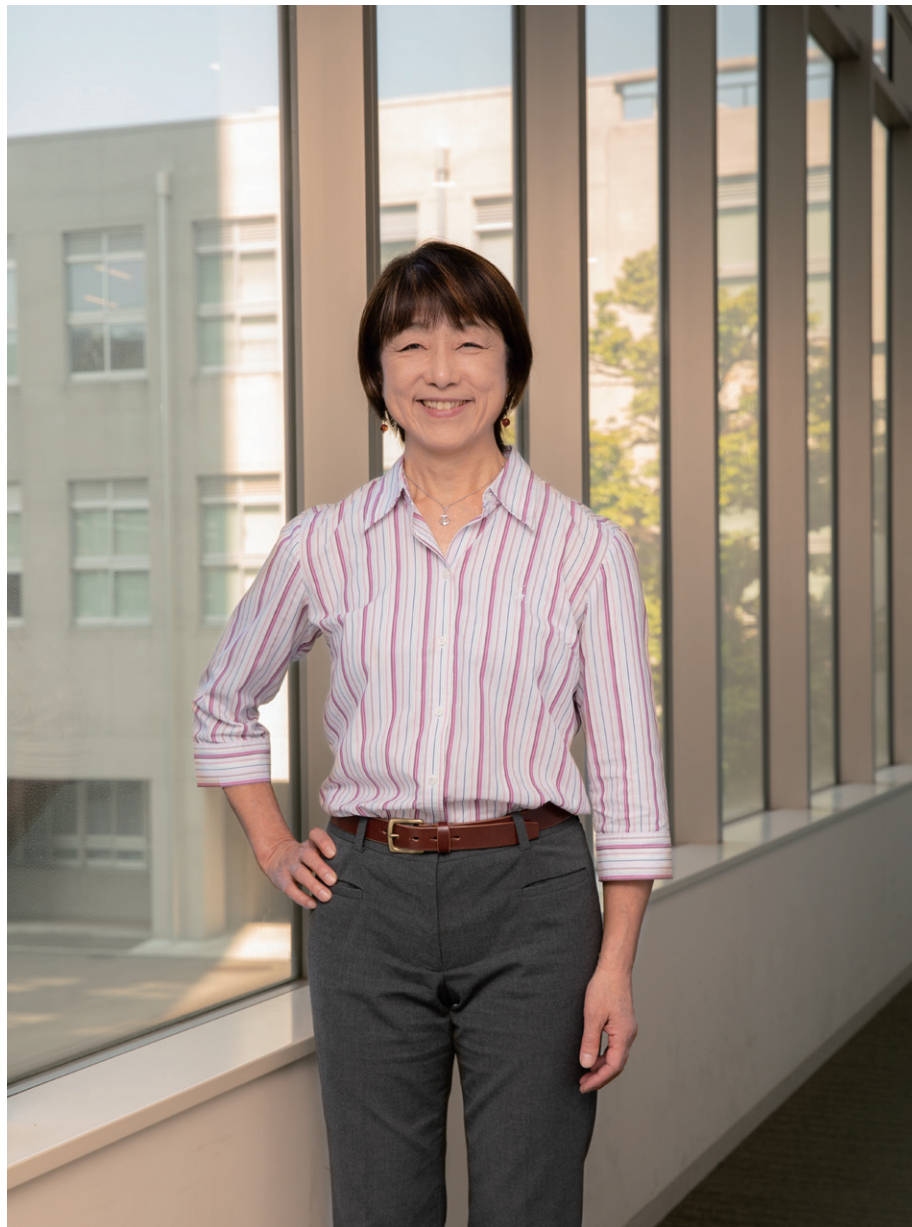
多様性を尊重してきた歴史を 未来社会へつないでいく

一連の施策の結果、早稲田大学では100を超える国・地域を出身とする、約8,000人の外国人学生が学ぶようになりました。隣の席に異なる国籍の学生が座り、多言語が飛び交うキャンパスの環境は、日本人の学生にとっても成長の場として機能するはずです。

1884年に初の海外留学生を受け入れた早稲田大学は、我が国でもいち早く外国人学生に門戸を開いた大学の一つでした。長い歴史の中で醸成された多様性を尊重する土壌は、21世紀における学生の可能性を大きく広げています。今後もさまざまな個性が交差する大学を目指し、教育改革を推進してまいります。

地球規模の課題に直面する現代社会においてグローバルな視点は欠かせません。
サステナビリティ教育を軸に各地での「体験」を通じて持続可能な社会のあり方を探る
高野孝子教授に、世界に通用する力を育む学びについて聞きました。

体験から当たり前を問い直し 世界を見る目を深める



文学学術院
教授
高野孝子

1963年新潟県生まれ。1986年早稲田大学第一文学部卒業、1989年同大学院政治学研究科修了、2000年ケンブリッジ大学修士課程修了。2005年エジンバラ大学博士課程修了。博士(School of Education)。特定非営利活動法人ECOPLUS代表理事。早稲田大学留学センター教授などを経て、現在文学学術院教授。

何かにぶつかり乗り越えた経験が 深い学びにつながる

私の研究の軸にあるのは、サステナビリティです。持続可能な社会をどう実現していくかを考えるために、場の教育や環境と開発、伝統知などの研究を行っています。野外・環境教育分野では、若い人が自然の中での体験を通して得た価値観が時間の経過によりどう変容していくのかを調査し、伝統知の研究では、アラスカネイティブの村々やグリーンランド、ニュージーランドのマオリの人たちが暮らす地域、福井県池田町などを巡り、人々の知識や知見を記録しています。

ミクロネシアのヤップ島で毎年実施している青少年向けのプログラムも教育実践のひとつ。ヤップ島は日本のように電気やガス、水道を自由に使える環境ではありません。「豊かさとは何か」をテーマにしたプログラムのなかで、参加者は日本よりも圧倒的にものが少なく不便な島で、裸足で大地を踏みしめ、波の音や風に包まれて眠ります。「以前は深夜までSNSを見て悩みごとを反すうしていたけれど、自然を眺めていると、そんな悩みはどうでもよくなった」という人もいます。もちろん、慣れない環境は楽なことばかりではありません。虫もいれば冷房もない日本とかけ離れた毎日を過ごす中で、ストレスを抱える人もいます。それでも、何かにぶつかり、乗り越えた経験は、その人の中に深く残っていきます。異なる環境の中で自分の当たり前が揺さぶられ、これまで見えていなかった価値観や暮らし方に出会う。その積み重ねが、広い視野で世界をとらえる力につながるのです。

属性ではなく 一人の人間として向き合う

世界に通用する人材になるために私が大事だと思うのは、「人を人として見る力」です。「どこの国の人か」ではなく、その人を一人の人間として見る。年齢や言葉、見た目の違いをその人の個性として受け止められるようになるには、多様な人々と一緒に暮らし、ともに作業する経験が必要です。ときにはぶつかり、ともに苦

勞し、笑い合う時間があるからこそ、相手を属性ではなく一人の人間として認められるようになるのだと思います。

その時に軸になるのは、自分が何者であるかを知っていることです。多文化交流の場では、想定外の視点から意見を投げかけられることがあります。そのとき、自分の根っこがないと、ぐらぐらと揺らいでしまう。特に、いまの日本には「こう考えるべき」「こう振る舞うべき」という空気があり、自分で考える機会が少なくなっているのではないのでしょうか。だからこそ、自分の軸となるアイデンティティーを確立させることが重要です。自分の軸は、海外に行かなければ得られないものではありません。東京でも見つけることができます。早稲田の周辺にも田んぼが広がっていた時代があり、地域の歴史や暮らしの積み重ねがあります。短い時間でもいいのでそこに暮らす人の視点に近づいてみる。スーパーに行き、道を歩き、人と話す。どこに行ってもローカルはあり、その地域の歴史や課題を知ること、自分を形作る学びを得られます。

自分の枠を超える経験を重ね 物事を多角的に見る力を養う

授業では、できるだけ体験を通して考える機会をつくっています。例えば「世界が30人の村だったら」というワークでは、安全な水にアクセスできない人、家に住めない人など弱者の立場に置かれた人を教室の隅に集めるようなワークをします。自分が社会的弱者となってみることで、貧困や暴力といった世界で起きている問題が、他人事ではなくなるのです。

情報があふれていてAIに聞けばすぐ答えが出るような時代だからこそ、学生には自分の枠を超える経験を重ねて、本質を見抜く力や自分の考えを発信する力を養ってほしいと思っています。留学は大きな機会ですが、もっと身近なところにも経験のチャンスは転がっています。いい本を読み、最高の音楽を聴き、人と対話することで、当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったと気づく。その気づきが、物事を多角的にとらえる力につながっていくのです。

早稲田大学では、学位課程以外にも目的やライフスタイルに合わせた教育プログラムを提供中です。歴史や文化、芸術、科学、ビジネス、外国語など、さまざまなジャンルの講座を、幅広い皆さまに公開しています。今回は早稲田大学エクステンションセンターが開講するオープンカレッジにて展開している講座「身近な『ものさし』で見る宇宙」の一部をご紹介します。

イラスト=なかむら葉子

身近な「ものさし」で見る宇宙

自然界の現象や法則を表す基本単位は、宇宙ではどのように機能するのか。「長さ」の概念を改めて理解し、宇宙空間の距離を測っていきましょう。



「1メートル」は誰が何を基準に決めたのか

私たちが生活のさまざまな場面で用いる、単位。1キログラム、5メートル、10分間と聞くと、誰もが同じ重さや長さ、時間をイメージできます。この基準はいつ、どのように生まれたのでしょうか。

世界の各地では、それぞれ独自の単位系を使っていました。英米の「ヤードポンド法」や日本の「尺貫法」など、その地域に根差した数え方です。しかし地域ごとに単位がバラバラでは、商売や科学の領域で混乱が生じます。そこで18世紀末、グローバル化が進む中、フランスが中心となり、新たな単位系が創設されました。誰でもどこでも同じ基準で測れる単位を目指し、まずは長さの「メートル」が定義されます。赤道から北極までの距離の一千万分の1を1メートルとし、基準となる白金製の原器が長く使用されました。しかし金属であることから、温度などの影響を受け多少の誤差が生じます。より精密な基準のために、クリプトンという原子の波長をもとに長さが規定されましたが、さらに精度の良い時間と合わせるため、一定の時間に光が真空中を進む距離として1メートルが定義されました。

あの星までどのくらい？宇宙での距離の測り方

では、いよいよスケールを拡大し、宇宙空間での長さについて見ていきましょう。メートルを基本としますが、数字が大きすぎてそのままでは不便です。宇宙科学の世界でよく使われる単位として、「天文単位」「光年」「パーセク」があります。地球と太陽の平均的距離である1天文単位は、約1.5億キロメートル。1auとも表記されます。1光年(ly)は、光が1年間に進む距離で、約9.46兆キロメートル。1パーセク(pc)は、「年周視差」が1秒角(1/3600度)となる距離を表します。年周視差とは、地球の公転運動のために時期によって天体の位置が変化して見える現象、およびその角度のこと。距離が近ければ角度は大きくなり、一年を通してほとんど位置が変わらないように見える天体ほど、地球から遠いです。この年周視差がちょうど1秒角になる時の天体との距離を、1パーセクとしています。1

パーセクは3.26光年ほどで、光年とパーセクは約3倍程度しか変わらず、どちらを使用してもさほど問題はありせん。観測者にとって便利であるため、天文学の分野ではパーセクで表すのが長年の慣例です。

実際に天体との距離を計測する方法はいくつかあります。比較的地球から近い天体は、年周視差を用いた三角測量で求められます。レーザー光を利用し、反射した光が戻ってくる時間から計算することも可能です。他方、年周視差やレーザー光をほとんど確認できない遠方の天体については、「標準光源」と呼ばれる既に絶対光度がわかっている天体と、外見上の明るさを比較して算出します。暗くなるほど、遠い距離にあるというわけです。他にもさまざまな計測方法がありますが、それぞれに限界もあります。前述した異なる手法をつないで遠い天体の距離を測る「宇宙の距離はしご」が用いられるなど、宇宙の果てを知るために、現在も研究が積み重ねられているのです。



早稲田大学名誉教授
前田 恵一

1950年大阪生まれ。理学博士(京都大学)。東京大学理学部物理学科助手、早稲田大学物理学教授、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジおよびクレーアホール客員教授、京都大学基礎物理学研究所特任教授などを歴任。専門分野は、理論宇宙物理学および重力理論。著書に『演習形式で学ぶ特殊相対性理論』(サイエンス社)、『演習形式で学ぶ一般相対性理論』(同)、『重力理論講義』(同)など。

1,800の公開講座から自分に合った学びに出会える「早稲田大学オープンカレッジ」

早稲田大学オープンカレッジでは、年間約1,800講座を開講しています。春夏秋冬の年4学期制のもと、早稲田校・中野校での対面とオンライン(ライブ・オンデマンド)で学べます。オンラインが初めての方は無料体験プログラムをご利用いただけます。在学生のご父母は入会金無料の特典があり、平日が忙しい方のために土曜1回完結の「サタデーレクチャー」シリーズも開催しています。ぜひ、お好みの学びをお探しください。



早稲田大学 コンティニューイング・ エデュケーション推進室

早稲田大学のコンティニューイング・エデュケーション推進室では、リカレント教育、生涯教育の分野での取り組み拡大を目指し、人生100年時代の大学「Life Redesign College」など、多くの社会人が継続的に学ぶことができる多彩な環境をご用意しています。詳細は右記QRコードからご覧ください。



<https://www.waseda.jp/inst/oce/>



2025年度の進路状況

2025年度の学部卒業生・修士修了者は約11,800名で、その進路は就職が7割、進学が2割、その他1割となっています。学部卒業生の就職率は98.4%でした(文部科学省の基準を参考に算出)。就職先は約2,500の企業・団体と多方面にわたり、社会のあらゆる分野に広く早大生のネットワークがあることが特徴です。

2025年度進路状況

	進路報告者	就職者	進学者	資格試験準備	その他
学部	8,668名	6,063名	1,948名	188名	469名
大学院	3,022名	2,175名	255名	132名	460名

就職者の主な就職先(学部卒業生・修士修了者合計)

内定先名称	合計	内定先名称	合計
アクセンチュア株式会社	133	東京都教員	38
株式会社NTTデータ	126	国家公務員一般職	38
合同会社デロイトトーマツ	90	日本電気株式会社	37
東京都職員I類	87	株式会社日本総合研究所	37
株式会社三菱UFJ銀行	73	明治安田生命保険相互会社	36
株式会社三井住友銀行	72	みずほ証券株式会社	34
株式会社ベйкаレント・コンサルティング	70	三井住友海上火災保険株式会社	34
株式会社ベйкаレント	69	トヨタ自動車株式会社	32
日本アイ・ビー・エム株式会社	68	農林中央金庫	32
東京海上日動火災保険株式会社	65	EYストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社	32
株式会社NTTDコム	63	全日本空輸株式会社	31
株式会社野村総合研究所	61	EY新日本有限責任監査法人	31
アビームコンサルティング株式会社	59	株式会社電通	30
楽天グループ株式会社	56	みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社	29
三菱UFJ信託銀行株式会社	52	伊藤忠商事株式会社	27
大和証券株式会社	50	野村證券株式会社	26
日本生命保険相互会社	49	本田技研工業株式会社	25
レバレッジズ株式会社	47	第一生命保険株式会社	24
PwCコンサルティング合同会社	46	東日本旅客鉄道株式会社	24
三菱重工業株式会社	45	日本航空株式会社	24
国家公務員総合職	45	損害保険ジャパン株式会社	23
株式会社みずほ銀行	44	株式会社博報堂	23
りそなグループ	44	富士フイルム株式会社	22
株式会社日立製作所	43	NTT東日本株式会社	22
ファーストリテイリンググループ	41	日本放送協会(NHK)	22
三井住友信託銀行株式会社	38	株式会社ベйкаレント・テクノロジー	22

※グループ企業等については本人申告に基づき集計

※(同)デロイトトーマツ(DT)については、DTコンサルティング(同)、DTファイナンシャルアドバイザー(同)、およびDTリスクアドバイザー(同)合併後の集計



WASEDA CAREER GUIDE 2026「キャリアデザイン編」(2025年12月発行)

総長候補者選挙の結果について

早稲田大学は、現総長の任期満了(2026年9月20日)に伴う総長候補者選挙を実施し、理工学術院教授 本間敬之を次期総長候補者として選出しました。

なお、本選挙は次期総長候補者を選出するための手続きであり、次期総長は、2026年9月21日に開催予定の理事会において選定されます。



保護者等の皆さまへ大学の近況、「早大生の今」をご紹介します

地域交流フォーラムを11会場(8月以降は6会場)で開催

主に1都3県(東京・埼玉・千葉・神奈川)以外にお住まいの保護者等の皆さまを対象とした地域交流フォーラムを開催しております。大学の取り組み(学びや就学、キャリア関連)のご紹介や早大生によるトークセッション、大学職員との個別相談や来場者同士の懇談も実施しております。お申し込み方法や詳細につきましてはウェブサイト(下記QRコード)よりご確認ください。



地域交流フォーラムHP



動画コンテンツで大学の取り組みをご紹介します

地域交流フォーラムにてご紹介している大学の取り組みなどを動画コンテンツにまとめています。保護者等の皆さまより多く寄せられるご質問をまとめたFAQもご紹介します。下記QRコードよりご覧ください。



早稲田大学教育支援募金のお願い



教育支援募金は、在学生の保護者の皆様をはじめ、本募金の趣旨にご賛同いただく方々からのご支援により、教育内容の充実や研究環境の整備を支える募金です。学生の成長と学びの充実のため、温かいご支援をお願いいたします。

インターネットでのご支援

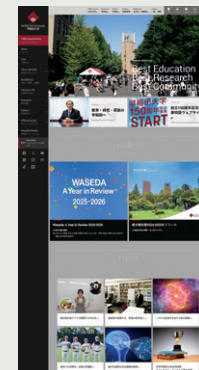
下記QRコードよりお手続きいただけます。



お振込みによるご支援については、総長室社会連携課までご連絡ください。お振込み用紙をお送りいたします。

総長室社会連携課 (TEL) 03-3202-8844 (E-mail) kifu-ml@list.waseda.jp

最新のニュースは、早稲田大学オフィシャルウェブサイトで!



本ページで紹介したニュースは、早稲田大学オフィシャルウェブサイトでもご覧いただけます。



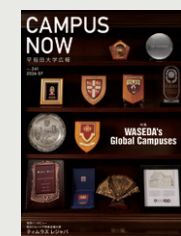
CAMPUS NOWはウェブサイトでもご覧になれます。

読者ウェブアンケート

皆さまのご意見を反映し、よりよい誌面にしていくためにアンケートにご協力ください。下記QRコードよりアンケートフォームへのご回答をお願いします。



表紙写真



800以上の海外協定機関
広がるネットワーク

建学以来、世界で活躍する人材の育成を目標に掲げる本学は、世界から研究人材や留学生を集め、日本から世界へ人材を送り出してきました。現在、海外とのネットワークは90以上の国や地域、800以上の大学や機関に及び、グローバルな学びの輪を形成しています。



NOW ON CAMPUS!

7月号の
気になるスポット



大隈庭園

@早稲田キャンパス

休み時間になると学生が集い、多言語が飛び交う大隈庭園。この庭園は、松平讃岐守下屋敷の名園に大隈重信が手を入れ、大隈の没後大学へ寄贈されました。6月、大隈庭園でICC(異文化交流センター)の交流イベントが行われ、浴衣姿の学生たちが庭園を彩りました。ICCの学生スタッフが運営する交流イベントが、年間200ほどICCラウンジや学内各所で開催されます。詳細はICC公式サイトをご覧ください。

[P6、7掲載]

WASEDA VISION 150

大隈重信が宣言した早稲田大学教旨を受け継ぎ、
本学は、創立150周年を迎える2032年の本学のあるべき姿を思い描き、
2012年に中長期計画“WASEDA VISION 150”を策定しました。

2018年以降、これをさらに進化させるべく新たなスローガンとして
「世界で輝くWASEDA」を掲げ、施策の検証と改善を繰り返しながら、不断の改革を実行しています。

詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

<https://www.waseda.jp/inst/vision150/>



WASEDA University
早稲田大学